1995-46-D/13

『DBC』7月号　通巻67号　1995.7.1発行　pp. 2-3
ダイヤモンド　ビジネスコンサルティング

VIEW POINT 視点

日本人はなぜ、組織をつくるのが下手くそなのか？

東京工業大学助教授
橋爪大三郎

橋爪大三郎（はしづめ・だいさぶろう）
昭和23（1948）年、神奈川県生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学工学部助教授。専攻は社会学。主な著書に、『冒険としての社会科学』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『民主主義は最高の政治制度である』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』など。

日本人は、近代がわかったつもりでいるが、ほんのうわっ面だ。まったく骨身にしみていない。

なるほど、都市の概観や生活様式を見れば、日本は欧米諸国とあまり違わなくなった。明治維新の目標は達成された。けれども日本人は、文明の成果をうらやましいと思っただけで、その根本である、近代という思想そのものを身につけようとは思わなかった。

＊

近代というものを、つき詰めて、煮詰めて、ぎりぎりのエッセンスにしたら、そこに何が残るか？　言い換えるなら、近代の本質とは何か？

近代国家か？　違う。科学か？　違う。高度な産業文明か？　違う。民主主義か？　違う。そうしたものはどれも、近代の副産物にすぎない。日本はそうした副産物を、曲がりなりにも手に入れた。しかし、その根本に何があるのか、知らないですませようとした。

近代の本質。近代の根本。それは、人間が、一人ひとりまったくバラバラな存在だということである。当たり前なようだが、これがどんなに酷薄な認識か、目をつぶってよく考えてみるといい。

一者。絶対の孤独。神のようにこの世界で唯一だが、神と違って無力な存在。これにおびえる魂の震えが、近代の出発点なのだ。こうした感覚は、ずっと昔にキリスト教が準備していたが、ある段階から人びとは、こうした人間のあり方を、ほかのものに還元して説明することをやめた。それが近代の始まりだ。

＊

こうした人間のあり方を、ひとはさまざまに呼ぶ。自由。人格の尊厳。個性。理性。意志。――自分が何かをしなければ、何も始まらない。要するにこれらは、そういうことを言っている。

たとえば、認識。人間は、対象がそこにあるように見えても、必ずそれを自分で確かめてから、その存在を信じる。哲学や科学は、こうした態度から出発する。

この原則は、石ころのような自然的対象だけでなく、集団や国家のような社会的対象にも適用される。伝統社会は、由来や成立ちのはっきりしない慣習で出来あがっている。そうしたものをいちいち疑い、その存在理由が納得できたものだけに従う。存在証明ができない慣習はすべて無視してしまう。近代はまず何より、こうした破壊的な運動なのだ。

そうするとどうなるか。人間が無条件で信じられるのは、自分だけ。そこで、各人の自由（な意志）が絶対となる。そして、人びとの自由を制約できるのは、論理的に考えて、人びとの自発的な合意（共通意志＝契約）しかありえない。こうして近代社会は、契約絶対の原則から出発する。社会は社会契約説によって再解釈され、伝統的な国家は、極大の共通意志（＝憲法制定権力）のうえに基礎づけ直された。この表現が、市民革命であり、法の支配であり、民主主義なのだ。

自分が自分の主人であることを強いられる。そして、契約が、法が、国家意志が、それらだけが、個人を拘束できる。なぜならそれは、もともと個人の意志がかたちを変えたものだからだ。この原理で社会を再組織する巨大な運動が、近代なのであり、そこから近代に独特な合理性と効率性が生まれる。

＊

この原理で組み立てられた組織を、アソシエーションという。そのひな形は、キリスト教の教会だった。同じ考え方で、自治都市や、株式会社や、国家が形成されていく。学校も、政党も、組合も、家族さえも、近代社会の機能集団はすべて、こうして形成される。それは、共同体（人間の安らぎの場）でありうるとしても、それ以前にまず、社会的機能を遂行するためのアソシエーションでなければならない。

ところが日本人は、社会をあるがままの秩序と受け取るので、近代のこの人工的な感覚が理解できない。

実例で理解するため、日本人の作った組織であるオウム真理教団と、キリスト教の教会とを比べてみよう。

オウム教団は、救済（ハルマゲドンの後まで生き延びること）のためには教団への所属（出家）が必要だとする。教団はそのまま共同体であり、外部に救いはない。これに対して教会は、メンバーの救済を保証しない。教会の内部／外部の境界線と、救済される／救済されないの線分とは直交している。教会のメンバーであっても救われる者と、救われない者がおり、しかもそれが誰であるかを互いに知ることができない。したがって、教会は神の共同体ではありえず、あくまでも人間が勝手にこしらえた組織という留保（人工感）がつきまとう。そこでは人間は、互いを信じすぎてはならず、あいだに規則や役割をはさんで互いに距離を置くのである。

＊

日本人はどんな組織をつくっても、いつの間にか共同体になる。組織の存続が自己目的化しはじめるのだ。たとえば、軍隊がそうだった。軍隊が、軍の果たすべき役割よりも軍の存続を第一に考えて行動した結果、日本国は破滅への道をつき進んだ。今日の学校も会社も、人びとに最大限の忠誠を要求している。組織を構成する個々人の自立性よりも、集団の与えるリアリティのほうが優先されるのである。これは宗教に近い。

こうした組織は、人びとの最大限の忠誠を期待できるという点で、効率的かもしれない。だが、そうした集団が自らの社会的機能に忠実であるかは、不確かである。そのため、組織を構成するそれぞれの部局が既得権を主張し始めても手を打てない。近代組織のもっている機能的合理性がどこまでも蝕まれていくプロセスを、日本の組織は内蔵しているのである。

●思想の問題として教育を考える

橋爪大三郎

Daisaburo Hashizume

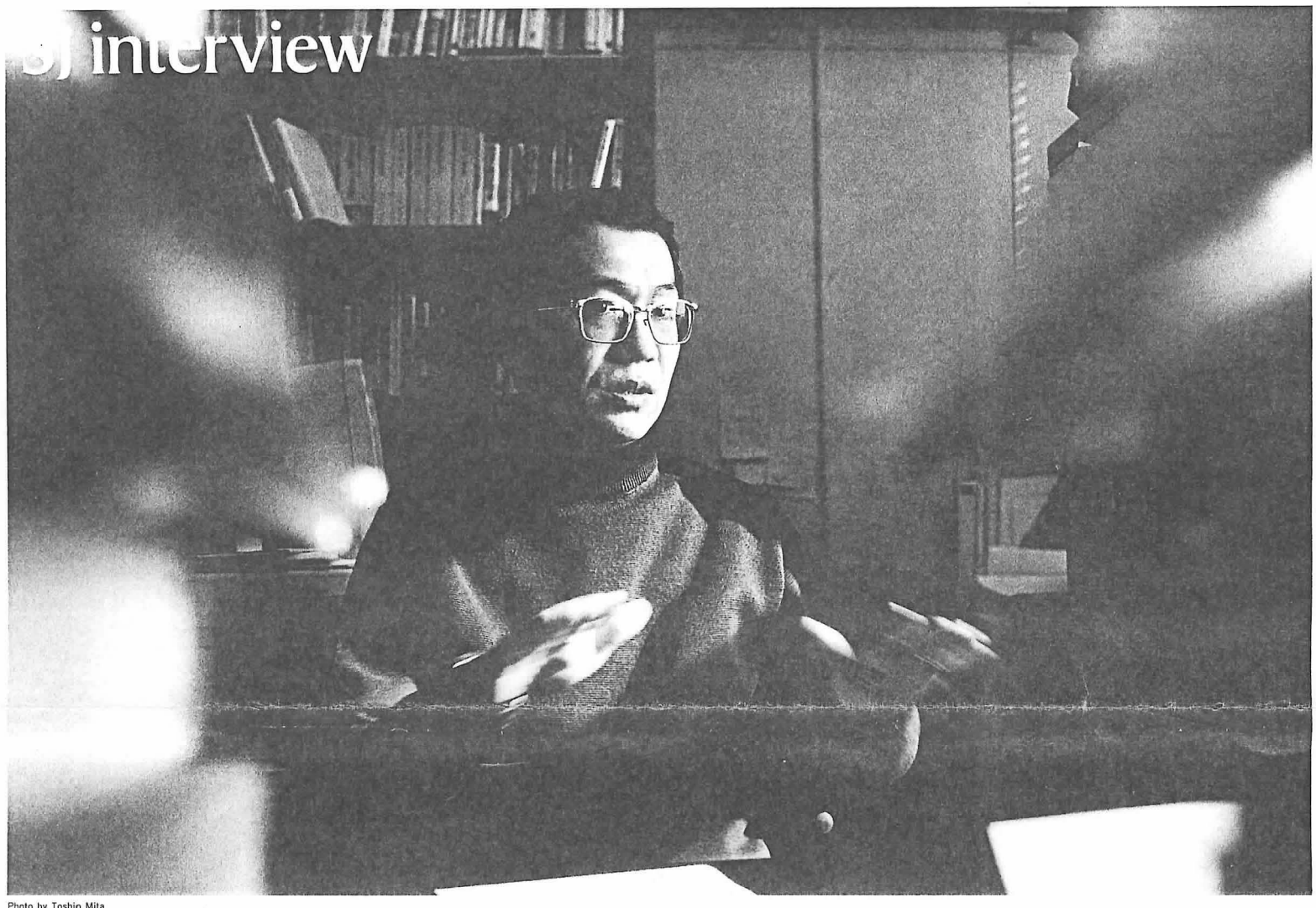


Photo by Toshio Mita

「思いやり」とか「命を大切に」とか言う前に、いじめる側の内部構造を明らかにし、いじめがなぜ悪いかをしっかり教えるべきです。

「おとながおとなをいじめるぐらいだから、子どもだって子どもをいじめる。いじめは悪いに決まっているわけで、それが倫理、道徳というものです。どんな社会も例外なし。われわれの場合、これは人権と法の思想とよばれています。このルール（いじめに抗する文化）を子どもがどう身につけるかが課題なんで。これと、ともかくいじめをなくそう式のとんちんかんな無菌衛生思想ほど、似て非なるものはありません」

と、橋爪さんが雑誌に書いてから8年あまり。この間に「子どもの権利条約」も批准されたが、いじめ―自殺のケースは後を絶たない。

「課題は課題のままで、状況はなにも変わっていませんね。今回（愛知県西尾市の中学生自殺事件）のケースで不思議なのは、自殺した少年があんなにいじめられていたのに、どうしていじめグループから離れられなかったのかという点でしょう。成績もよかったし、落ちこぼれでもないのに、担任から見ても、ほかの子から見てもいじめグループの一員として行動している。そうしたいじめグループの内部の構造を見ていかないと、いじめの問題は分からない。世間の人びとは、いじめられる子をまず問題にしますが、順序が逆でいじめる子がなぜいじめるかを先に明らかにすべきです」

いじめる側とそれに加担・傍観する側の問題をあいまいにしていることは、いじめを人権と法に基づくルールの問題としてとらえる意識が、学校にも親にも薄いということであろうか。だから対策も橋爪さんから見ると、「命を大切に、思いやりの心を育てる」といったピントのボケたものになってしまう。

「〝命を大切に〟思う〝やさしさと思いやり〟ある人が〝相手の気持ちをくみ取る〟→いじめがなくなる、というのでは、それはその人の恣意＝相手への恩恵ということになってしまう。この感覚・この発想がいじめの温床なんです。それだと、同情の余地のない悪者はいじめてよいという理屈になる」

思いやりの前に、いじめは社会的ルールに違反していることを子どもたちに自覚させなくてはいけない。ルールとは子どもが社会に出て適切な行動をとるための決まりである。それを子どもはまず家庭で学ぶ。家庭で教えきれない部分を学校が教える。家庭と学校では教えるルールの内容が違うのだが、その区別ができていないという。

「家庭では、性別・年齢によって役割が固定している。兄、弟とか、子どもだとか、母親だとか、人間一般として育つ前に家族の一員として育つのです。それに対して、学校のクラス空間ではひとりひとりが対等です。個々の子どもは原則的に平等なクラスの一員としてふるまう。これは人は法の下で平等であるとする民主主義社会のひな型で、子どもは学校で、社会に出てからのふるまい方を学ぶわけです。

学校の存在理由の一半は、集団生活の決まり、ルールを教えることにある。そうした社会生活の基本となるルールが学校で確立しないと、知識の伝授である教育そのものが成り立たない」

学校のルールは、それがなぜあるのかという理由がはっきりしていて、子どもにとって守りやすく、ルールに違反したらどうなるかもはっきりしている必要があるという。ところで、ルール違反を誰が判断するのだろうか。学校には裁判所がない。

「学校ではルール違反は犯罪として罰するのでなく、教育的に指導をする。誰が正しいか、正しくないかを判断し律するのは教師です。そこが出発点。ルールという土俵の中で、教師がいじめる子が悪く、いじめられる子は悪くないと断言してやれば、いじめられた子も救われる。プライドを傷つけられない。それには、教師が生徒の友だちになろうというやり方ではいけない。友だちでは誰が正しいかを決められない。それに、同じことを親が自分の子に言っても効果はないのです。ルール違反の理由は千差万別ですが、特にいじめの場合、なぜいじめたのか、その理由を本人に分からせることが重要です。分からないようなら、強制も必要でしょう。最初のルール違反のときにきちんと処置する手間を惜しむと、あとが厄介です」

橋爪さんの明快な論旨からいえば、学校のルールである校則の目的は、当然ながら子どもたちが市民社会のルールの本質を体得することにある。

「校則は、できれば世界に通用するようなものがいいでしょうね。あるインターナショナルスクールの校則はたったの3条です。ひとつは、ほかの子の権利や持ち物を尊重する。二つめは、ほかの子の勉強の邪魔をしない。三つめは、ほかの子を傷つけるようなことを言ったり書いたりしない。日本の学校は、校則の根本をかん違いしていて、教師の管理をやりやすくするための規則になっている。そして、規則を守る＝管理に従うほどよい生徒という思いこみから、規則の数がとめどもなく増えていくのです」

話はさらに親の教育権、教育の自由化、学校を選ぶ自由に及ぶ。明治国家による義務教育の実施以来からの日本の教育システムの根幹に、改革のメスを入れなければ、いじめに象徴される教育の歪みはなくならないと、橋爪さんは考えている。

初冬の長い日脚が差し込む研究室には社会学の蔵書に混じって、中国に関する書物が目立つ。88年に上海に1カ月滞在して、その経済成長スピードのすごさを実感してから、中国に注目している。社会科学的な関心だけでなく、中国のロックンローラー、崔健（ツイ・ジェン）にいれこんでいるとか。昨年は彼のブックレットも著した。

「彼は中国ロックのスーパースターだが、日本のロックンローラーとは違って筋金入りです。根性が入っている」

橋爪さんの口から出た「根性」という言葉で、崔健を聴いてみたくなった。

PROFILE

はしづめ だいさぶろう●1948年神奈川県生まれ。東京大学卒業。同大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学工学部助教授（社会学）。主な著書に『仏教の言説戦略』『はじめての構造主義』『冒険としての社会科学』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『民主主義は最高の政治制度である』『橋爪大三郎コレクション』（全3巻）『崔健――激動中国のスーパースター』などがある。

PRESENT

橋爪さんと竹田青嗣さんとの最新対論『自分を活かす思想/社会を生きる思想』（径書房）を5名様に差し上げます。ご希望の方は、葉書に住所・氏名・年齢・職業、本紙についてのご感想・ご意見を明記のうえ、下記へお送りください。発表は賞品の郵送をもって代えさせていただきます。2月15日の消印まで有効です。

▼あて先／〒107 東京都港区南青山2-1-1 ホンダ安全運転普及本部「SJ」プレゼント①係

『サンサーラ』第6巻第6号通巻60号　95年6月号 pp. 259 徳間書店（おまけ）

さんさ〜らいふ

ひとはなぜ愛するのか？

『性愛論』
橋爪大三郎著
（岩波書店　二二〇〇円）

評者　大塚英志　評論家

フェミニズムとは何であったのだろう、と近頃ぼくはよく考える。八〇年代の消費社会に呼応する形で浮上し、ぼくの同年代の女性たちの〈私探し〉に寄り添ったこの思想を妙な言い方だが、今、とても愛しく思う。そしてそのフェミニズムの輪郭が、九〇年代に入るとひどく曖昧になってきた印象をもつ。なるほど上野千鶴子さんに言わせれば、もはやフェミニズムはフェミニズムと名乗らずともいいほどに具体的な場に浸透し、援用されているということになるのだろう。その一方では、本書で橋爪さんも指摘しているように、フェミニズムは社会学やその他の一領域として「〝エスタブリッシュ〟された学問」として認知されつつもある。

それは一つの学問なり思想の成熟の形としては妥当な姿なのだと思う。だが、フェミニズムが八〇年代にフェミニズムとしてあったのは、それが思想なり政策科学なりに収斂していくためのものであったとはぼくは思いたくない。むしろ、あの時の女性たちの言葉に出来ない感情の微妙な襞にフェミニズムは入り込んだのであり、だからこそぼくはフェミニズムと消費社会的感受性の関係を重視し、上野さんを怒らせたりもする。そんなふうに思想を情緒的にまずとらえるのはぼくの悪い癖で、その意味では徹底して理論的である橋爪さんの仕事を論ずるのにぼくは最も不適切である。ただ、フェミニズムが彼女たちの心の襞に輪郭を与える仕事であったのなら、その言葉はそもそもフェミニズムが問題とした男であるぼくたちと女である彼女たちのディスコミュニケーションを埋めるための言葉に成熟していく可能性があったはずなのだ。そしてそれはフェミニズムの側の一方的な努力だけでは叶わないものだった、と男であるぼくは今、思う。

橋爪さんは『性愛論』と題されたこの難解な書物に於ける試みを「性や性愛の問題を、フェミニズムではない文体で、誰にでも届くニュートラルな言葉でのべてみることだ」と書く。そのことばにぼくは深くうなずく。

橋爪さんはフェミニズムを批判しようとしているのではない。むしろ「余計なお世話」なのにもかかわらずフェミニズムが「これまでの殻を破り、言説のスタイルの転換」をはかるための手だてを示そうとしている。その「余計なお世話」の動機にはフェミニズムを男と女が共有する言葉に作り変えていこうとする橋爪さんの誠実さがあると見てとるべきだ。フェミニズムが立ちどまってしまったかに見えるのは、要するに問題を彼女たちだけにゆだねてきたからである。それは、ぼくたちと彼女たちの問題であったはずなのに、である。

だから、フェミニズムの言葉を「誰にでも届く」ものに作り変えようとする努力はとても重要である。体系だった思想ではなくむしろ彼女たちの不定型な気分にこそ根ざしたフェミニズムは、それ故に多くのやり残しがある。それをもう彼女たちにのみ押しつけないために、本書は活用されるべきである。

この人に聞く

橋爪大三郎は剛球、変化球を
さまざまに投げられる社会学者である。
大学院を修了後、どこにも属さず、
つまり浪人して執筆に勤しみ、
その足腰と胆力を鍛えた頼もしい知識人である。
氏の執筆範囲は、若者向け軟派雑誌から、
硬派雑誌までありとあらゆるジャンルに亘り、
しなやかな視点を読者に提供している。
氏に日本の〈現在〉が抱える問題
を話してもらった。

橋爪大三郎

——阪神大震災からオウム事件にかけての異常な出来事、それに不景気の問題とか日米自動車問題等いろんな事象が起きていますが、この現在の日本の社会状況についてどうお考えですか。

橋爪　マスメディアの高度な発達が行き着くところまで行き着いた結果、メディアが人びとの現実の中に占める割合がどんどん増えている。我々の現実感の大部分がマスメディアに依存しているという状況が生まれています。これは現代社会の必然ですね。もともとは現場の中で受け継がれていくことで大部分の知識は成り立っていたわけですが、それがメディア化されてくると、現場を離れてテレビで見ることになる。実際には山に行ったこともない、川で泳いだこともない、しかしテレビで見て知っている。こういう人たちが増えてくるわけです。テレビというのはメディアであって、本来は私たちと現場との間にあるわけですが、スイッチをひねるだけで世界中の現場が見えるものだから、逆にその中に現実世界があるような気がしてくるんですね。そうすると、マスメディアが報道しなければその現実はない、現実と違ったことでも報道してしまえばそれが現実になってし

『SECURITARIAN』 441号　95年9月号 pp. 55-57 防衛庁

1995-46-②/13

1995-46-④/13

まうといった状況が出てくる。さらにマスメディアによって、価値基準や行動基準が変化していくということが起こる。たとえばテレビの中で女の子が裸になったりしますね。普通女の子は裸にならない。なっちゃいけないわけです。それが伝統的な価値観でしょ。初めのうちは「テレビだからあんなことをやっている」と思っているのですが、毎日そういうものを見てると、「これが当たり前なんだ」と考えるようになってくるわけです。そうすると、メディアに合わせて自分の行動をコントロールするようになって、テレビと無関係なところでもそういう行動が増えてくる。こうして価値基準や行動基準がメディアによって逆に造られてしまう。メディアによって支配されるという状況が起こってくるわけです。

ついには現場を無視したことをメディアがやるといったことまで起こる。たとえば湾岸戦争報道でアメリカのテレビが、ペルシャ湾に原油が流れて野鳥が油まみれになったところを映しましたね。これは、サダム・フセインが原油を流したせいだということになっていましたが、どうもあれは「やらせ」だったらしい。全然関係ない場所にアメリカが石油を撒いて野鳥を油だらけにし、そこをテレビに映させたという疑いがあるわけですね。その真偽はいずれ明らかになるでしょうが、とにかくサダム・フセインが悪い、アメリカは正義という形でどんどん報道された。その結果、世界中から軍隊が集まってくる、日本は合計130億ドルを出して掃海艇を派遣するといった具合に、世界各国を対イラク戦争に結集させた。メディアが現場をどういうふうに報道したかによって、戦争そのものの帰趨が左右されてしまうという面まで出てきたわけです。また現場では確かに兵士は戦争をしているのですが、アメリカの戦闘機パイロットが「まるでテレビゲームのようだ」と言っていたようにメディアと現実の戦争の区別がほとんどつかなくなる。塹壕の中で苦しい目に遭って逃げるところを殺されたイラク兵もたくさんいたと思うんですが、そういう部分はメディアに取り上げられない。そうするとそれは存在しなかったことになってしまう。このように、人びとがメディアに左右される度合いが非常に大きくなってますね。

はしづめだいさぶろう

●

1948年神奈川県に生まれる
東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。
現在、東京工業大学工学部教授
著書に『はじめての構造主義』
『冒険としての社会科学』
『現代思想はいま何を考えればよいのか』
『民主主義は最高の政治制度である』
『大問題』など多数

オウム事件の場合も、そもそもオウム自身がメディアを前提にして出来上がっている集団なんです。報道の中でオウムの虚像がどんどん大きくなって、人びとにパニックを起こさせる。こういう構造になっていた。オウムの実体はどこにあったのかはよくわかりませんが、80年代から90年代にかけてオカルトブームがあって、テレビや雑誌などのメディアがそういうものをあたかも実在するもののように扱った。メディアが取り上げればそういう事実があることになる。超能力があるとすれば、誰が一番か、それは麻原氏だと思った人たちがそういう実体を形成してしまった。こうしてメディアがつくってしまった集団を、今度は逆に追いかけている。我々はメディアが作り出した現実に、そんなふうに振り回されてしまっていいのか。オウムはまだ取り締まれるからいいとしても、日本国そのものもやはり国民がある一定の現実感を持って、その上につくられているものでしょう。それがこんなあやふやな現実で大丈夫なのか。これが今、一番の問題じゃないかと思いますね。

――アメリカや西ヨーロッパといった先進資本主義諸国でも、日本と同じような問題を抱えているのでしょうか。

橋爪　状況は似ていますが、欧米の場合、メディアが虚像と化することに対して非常な警戒感を持っていますね。〝真実を確かめよう〟という手続きを色々もっています。たとえば、議会や法廷での証言。これは、本人が直接報告するわけですからメディアじゃない。これに対する信頼が非常に強い。それから、真実の基準となるテキストがある。キリスト教であれば聖書ですね。宗教以外では、憲法とか法律といった正しさの基準となるテキスト、そしてそれを操作する法学者、論理学者といった人たちに対する信頼があります。どんなに世の中が混乱しても、これらが基準になっている。

日本の場合、それに匹敵するものがないんです。日本国憲法は解釈改憲を繰り返して、書いてあることと解釈が明らかに違うんですから、これが正しさの基準になるのかどうか。自衛隊だって軍隊であるようなないような…。こういうことではなにを信じていいのかわからない。結局、明治以後、日本人が書いたテキストで本当に信頼に値するものがあるかとよく考えてみると、ないんですね。そういう意味で、メディアが現実や価値観を勝手に作り出してしまうのをどうやってチェックするかという方法論や心構えが、日本にはない。これが現状をさらに悪くしている。本当はメディアには現実を作り出す力はない。増幅するだけなんです。メディアそのものには現実や価値を構成する力はないというふうに突き放して考えるべきですね。

――話が少し変わりますが、日本の安全保障に関して、今までの防衛論議と今後なすべきことについてご意見をうかがいたいのですが…。

橋爪　日本に防衛論議があったでしょうか。非武装中立とか憲法9条がどうとか、入り口のところで終わってしまって、これまで実質的な論議は何もなかったんじゃないですか。

この間、アメリカのマサチューセッツ工科大学が、学者ら大勢を集めて2010年までの東アジアの危機管理のシミュレーションをやったそうですが、その中でいろんなことが起こる。たとえばインドネシアでイスラム原理主義勢力がクーデターを起こし、日本企業との間に人質事件を起こして日本が苦境に陥る。結局、日本が解決できないでいるうちに、台湾政府が華僑ルートで解決してしまった。それからカンボジアや中国でいろんなことが起こって、日本はかなり厳しい選択を迫られて、政権も2回ぐらい交替する。そういった思考実験をアメリカでやっているんです。こういったことは日本でこそやるべきことじゃないかと思いますよ。

それに、もっと軍事常識を勉強する必要がありますよね。自衛隊がPKOに行くときも、小銃を携帯するしないとか、相手が撃ってきたら撃ち返すとか、危険があったら逃げるとかいってましたけど、それは子供の議論ですね。もし、派遣する人員の安全、任務の遂行について最大限の責任を持つつもりなら、そんな議論には決してならないと思うんですけれども…。そういう議論が一部の政治家のみならず、マスコミや国民の間にまかり通ってしまうということは問題だと思います。

やはり、十分な軍事知識がないと、政治家は務まらないんじゃないかという気がします。チャーチルはイギリスをファシズムの脅威から守った偉大な政治家です。ドイツは第一次大戦の結果、軍備が制限されましたが、わずか3年の間に急速に再軍備をしてしまった。チャーチルはその動静をずっと摑んでいたわけですね。当時、第一次大戦後で平和主義の考えが非常に強かった中で、ここで相手に合わせて装備を更新しておかないと、危機が現実のものになるということで対抗措置をとって、結局ヒトラーの侵攻を食い止めることができた。あれでイギリスが倒れていたら、アメリカといえどもなかなか大変だったでしょう。そういう意味で、世界史上の最大の危機に歯止めをかけたといえますね。そこにはチャーチルの軍事知識、さらに言えば、イギリスという国が政治家に要求している素養の一つとしての軍事常識というものがあったわけです。

日本の場合、そこが甘いんです。政治家、ジャーナリストたちがそういう知識を持って、それがどういう意味があるかということを、国際環境や現在の社会情勢の中できちんと把握して意見を述べることが必要です。イギリスでは議会のなかで軍事を専門に論ずることのできる委員会が機能していて、そこでいろんな議論が行われ、国民はそれをモニターできる。日本でも、自衛隊の装備に関してどれだけの意味があるかということを本来、国会で十分議論すべきでしょうが、例によって憲法9条の問題などでゴタゴタしてしまって、そこから先の議論というのが全然なかった。これは『国民的不勉強』なんですね。そもそも日本では『軍事』がつくと研究できない。タブーになっていて、それを専門に研究する人もほとんどいない。だいたい戦前からして、軍事と名のつく講座が日本中の大学にひとつもないといった有様でした。現在でもそうですね。シビリアン・コントロールのためにはその能力が必要なんです。シビリアンが軍事常識を持っていなかったら、軍事を統制できるわけがない。制服の方もシビリアンが信頼できなかったら士気にかかわりますよ。軍事常識に基づかないシビリアン・コントロールは危険だと思います。シビリアン・コントロールはもちろん大切なことで、大変結構だと思いますけれども、そのためにはもっと軍事を知らなきゃならない。

オウム事件の場合も、そもそもオウム自身がメディアを前提にして出来上がっている集団なんです。

1995-46-⑤/13
『自由時間』第6巻第2号通巻95号　95年2月2日号 pp. 19　マガジンハウス

社会学

男らしさ、人間らしさ、自分らしさ。これらを同時に考えて男は解放される。

橋爪大三郎さん　東京工業大学助教授

手塚治虫の漫画『リボンの騎士』をはじめ、女の子が男として育てられるという物語は結構多い。

「性には二通りのレベルがあるんです。身体的性であるセックスと社会的性であるジェンダー。本来、この二つの間に直接のつながりはないんですよ」と、橋爪さんは言う。

セックスが女性でも男性のジェンダーを持つことはできるし、もちろんその逆だってあり得る。つまり、肉体的には女でも、男として育てられれば男性としてふるまうようになるということ。男らしい行動様式、女らしい行動様式というのは、学習によって身につくもので、生まれつきのものではないのだ。

はしづめ・だいさぶろう●1948年神奈川県生まれ。『橋爪大三郎コレクション』全3巻（勁草書房）など著書多数。近著は竹田青嗣さんとの共著『自分を活かす思想　社会を生きる思想』（径書房）。

では、ジェンダーとしての男と女はどうして生まれてきたのだろう。

「女性には子供を産むという機能があるからです。男女が子供をつくって一緒に生活することで、家族ができる。その中で、男性は父として、女性は母としてふるまう。これがジェンダーの起源です」

男と女がいなければ、家族は成り立たない。家族の中で男は父としての行動様式を、女は母としての行動様式を求められるようになる。そして、社会の最小単位の中で生まれた男女の役割分担が、それ以外の場面でも尊重されるようになっていく。要するに、その社会で望ましい父親に求められる資質が〝男らしさ〟、望ましい母親に求められる資質が〝女らしさ〟の原点となるわけだ。

ただ、中世まで、この区別は今ほど明確に意識されていなかった。今のようにジェンダーとしての男女差が強調されるようになったのは、近代産業社会の到来とともに、男が外で働くようになってからだ。

それまで男女は、一緒に田畑を耕したり、子育てをしたりしていた。父母としての役割分担はあっても、二人で働き、家事をしていたわけだ。それが近代に入り、男が工場に出掛けて〝金を稼ぐ〟ようになる。女は働かなくてもよくなった代わり、家事や育児を専門的にやることになった。家族を食わせてやる男は偉い、という思想も生まれ、家父長制が強化された。

「家父長制という文化の中で、男は主導権を握り、女を女であることの中に閉じ込めてしまったんです。女が社会に出ようとしたら『女らしくしろ！』と言ってれば良かった」

しかし、女たちも人間としての権利を主張しはじめる。

家庭には男女が必要だが、学校、市場、企業といった社会においては、実は男女を区別する必要はない。フェミニズム運動が盛り上がり、男らしさを振り回す男は攻撃されるようになった。

男が作ってきた社会の中で、今まで男は自分が男だと意識することはあまりなかった。ところが、男イコール人間ではないことにようやく気づかされることになった。

こうした状況の中で、男たちは追い詰められている。それが現代だ。

最近、ゲイが注目されているのはこういった社会状況のせいではないか、と橋爪さんは分析する。

「自分が男であることを意識させられたことで、逆に男らしくふるまえなくなる。フェミニズムや家父長制が強い社会ほどそれが顕著で、アメリカでは潜在的なものも含めると、15～20パーセントの男性が同性愛者だといいます」

ちなみに日本では2パーセント程度。フェミニズムはアメリカより弱いし、家父長制は強い気もするが、母親も強いせいだろうという。そういえば、ゲイ・ライターの伏見憲明さんが「本来、ゲイは性転換願望者とは違って、男らしさにひかれるんです」と言っていた。

今の世、ゲイになれない男が生きていくにはどうすればいいのだろう。

「昔ながらの男らしさを押し出すだけでは、アナクロでしかない。これからは、男らしさ、人間らしさ、自分らしさを同時に考えて、自分の生き方を模索しなければいけません。それができて初めて、男性は解放されるのではないでしょうか」

もできる。働く女性は、仕事も家事もそれなりにこなす。考えてみれば、女のオタクって少ないしなあ。

「これは私見ですが、男はどこか抜けてて当たり前なんです。男性はアホでも器用にこなせないのが男の特徴。くよくよ短所を気にするよりも、長所を伸ばすことを考えよう。目指すは全面展開ではなく、一点突破だ！」

1995-46-⑥/13

『自由時間』第6巻第9号通巻 102号　95年5月18日号 pp.74-75 マガジンハウス

フロイト以降20世紀のエロス論

神中心のエロスからの脱却をめざす

この20世紀においてもエロスは、我々の思索の対象として最も主要なもののひとつであった。そして今世紀のエロス論をリードしたのが、フロイトの精神分析である。「神がセックスを作った」とするキリスト教の常識を根底から覆す思想の歩みを、橋爪大三郎さんに聞いた。

取材・文／永江 朗　写真提供／PPS通信社

フロイト以降の性の論客たちについて考える前に、フロイトの業績をもう一度考えてみるべきである、と社会学者の橋爪大三郎さんは語る。

「20世紀の欧米では、フロイトの考えた精神分析を抜きに、性を語ることはできません」

なぜ欧米社会にとって精神分析が画期的だったのか、日本人にはわかりにくい。なぜなら、ユダヤ教やキリスト教など、一神教の伝統が欧米社会にあったからこそ、精神分析は衝撃的だったのである。

「精神分析以前の性の考え方、エロスについての考え方は、すべて神が中心でした」

ユダヤ教やキリスト教では、神が人間を作ったと考える。人間の身体もセックスも、すべては神が作ったもの。人間にとって性は宿命だった。

「セックスは神の前では従属的な位置にあります。神が許す限りにおいて、人間はセックスを追求してよろしいとされた」

人間は家族も作るし、子供も作る。しかし、それにかまけて神を忘れてはいけない。他人の妻や夫とセックスすることも、結婚しないのにセックスすることも、また、同性愛も、神が許していないからいけないと考えられた。

神が性を作ったのではなく、セックスが神を作った。

「ところが、フロイトの精神分析では、この考え方が逆転するのです」

人間の文化も思想も、すべては性欲が形を変えたものだ、とフロイトは言った。

「フロイトによれば、神が存在するということも、人間の性的な妄想の結果である。神が性を作ったのではなくて、性が神を作ったのだという

ジクムント・フロイト
●精神分析の創始者。子供や大人にも性欲があり、それが精神的に重要な意味を持っていることを臨床的に明らかにしたフロイトは、20世紀のエロス論の行方を決定づけた。

ウイルヘルム・ライヒ
●ベストセラー『性の革命』の著者。精神科医、神経症患者たちはエネルギーの蓄積と放出に差があるとし、オルゴンボックスなる道具で治療。米国FDAに販売禁止処分をうけ、刑務所の中で死んだ。

ことになります」

キリスト教者にとって、まさに天と地がひっくり返る大革命である。

さらにフロイトは、家族の中にもメスを入れる。

「人々は潜在的に近親相姦を願望しているが、それは常に抑圧されていると彼は考えました」

フロイトによると、家族には、息子が母を求め父を憎むエディプス・コンプレックスや、娘が父を求め母を憎むエレクトラ・コンプレックスといった基本的な構造があり、そこから社会や文化は発生している。

「精神分析は、宗教が教えてくれるあるべき人間の姿という眼鏡を通して人間を見るのではなくて、人間のリアリティを、ありのままを見るというスタイルを持ちました」

現代思想としては、無神論であり、唯物論的でもある。その意味ではマルクス主義と近いところがある。

ナチズムの大衆心理を性で分析したフロイト左派。

しかし、精神分析はマルクス主義のような社会思想には展開していかなかった。フロイトの後は、心理学や精神医学の中のひとつの学派として、思想界の地下水脈として、影響を及ぼしていった。

フロイト以降の精神分析の流れとしては、E・フロムやW・ライヒ、H・マルクーゼら、マルクス主義とも重なり合うフロイト左派がいる。本来、精神分析とマルクス主義は水と油である。しかし、精神分析はナチズムの社会心理学的研究に大いに役立った。そのため、一時期、両者は接近したのだ。

精神分析はフランスの現代思想のなかにも脈々と受け継がれていく。J・ラカンが代表的だが、C・レヴィ＝ストロースやM・フーコー、J・クリスティヴァにも多大な影響を与

ヘンリー・ミラー
●『北回帰線』『南回帰線』で知られる。ときにはワイセツとも思える大胆な表現で性の現実を描いた作家である。私生活でも生涯に200人近い女性と関係し、6回結婚した。

荒木経惟の超論的エロス I

えている。

「人間の精神活動について、科学的で分析的な方法でまとまったことを言おうとすると非常に難しいけれども、精神分析はある仮説をもって大胆にそういう主張をしました」

すべてを性欲から説明しようとしたわけである。

今世紀、精神分析に匹敵する原理論があるとしたら、他にはソシュールの記号論ぐらいしか見当たらないと橋爪さんは言う。

フロイトの性欲説もまたひとつの神話である。

構造主義文化人類学の開祖、C・レヴィ＝ストロースは、さらにフロイトまでをも転換した。

「フロイトは近親相姦は望まれているからこそ、禁止されているのだと言った。しかし、レヴィ＝ストロースは、近親相姦を望んでいる人間というのも神話である、フロイトも神話であると言いました」

のちに構造主義はフロイトを継承すると同時に、レヴィ＝ストロースの考えたリアリティをも継承するという、屈折した発展をする。

M・フーコーは、心理学や精神病理学から出発して、歴史学へと進んだ哲学者である。晩年は性の問題に取り組んだ。

フーコーがやろうとしたことは、近代の主体、「自我」がいつ生まれたのかを探ることだった。

「最初から自我があったわけじゃないようだとフーコーは気がついた。もうひとつ彼が気づいたのは、自我と性欲はメダルの裏表、ワンセットになっているということ」

人間は、オマエは性欲を持っているぞと教会から言われると、そうだと思ってしまう。そこから自我が生まれたんじゃないだろうか、とフーコーは考えた。

ギリシャ的エロスを、求めながら死んだフーコー。

が、ヨーロッパ文化にはユダヤ＝キリスト教的エロスとは違った、ギリシャ的なものもある。そこでフーコーは、ギリシャ文明の中に人間の性的存在としての起源を求めようとした。

しかし、それを探究する著書『性の歴史』が未完のまま、フーコーはエイズで死んだ。

フロイト以降も、欧米社会はキリスト教の枠組みから抜け出せなかった。その点において、フーコーのやろうとしたことは欧米社会にとっては本質的な仕事だった、と橋爪さんは言う。

「しかし、イスラム圏やヒンズー圏、あるいは日本のような、もともと非キリスト教社会にとっては、彼の仕事は相対化されると思います」

文学のジャンルでは、D・H・ロレンス、H・ミラー、N・メイラー、V・ナボコフらが性を追究した作品を開拓していった。

「19世紀の文学のテーマは『自我』でした。私は何か、私はなぜここにいるのか」

が、その問いに答えることは難しい。そこで、他者との関係、神との関係を書いていくことによって、自我をはっきりさせようとした。

ところがそこに精神分析ショックがやってくる。

「最初はプルーストのように意識を記述したりしていきますが、無意識さえも疑わしいとなってくれば、自分の身体の現象、つまり性というものを記述していくしかない」

それは非常に即物的、見ようによってはポルノのようにも見える。しかし、記述の動機はそうではなくて、神学的・形而上学的問いが、自分を巡る問いに形を変え、さらに性と実存を巡る問いに形を変えたのである。

「崇高さと卑俗さとが、ひとつのこととして描かれてしまう文学が、性を扱う現代文学の特徴なのではないかと思います」

しかし、そうした性の文学も、本当に新しかったのはパイオニアたちの仕事だけである。性に対する考え方が相対的になってしまった現代では、二番煎じ、三番煎じは単なる風俗になってしまう。

いまエロスを語ることは非常に難しくなった、と橋爪さんは言う。

「エロスというのは人間が究極的に何を望んでいるのかがわからないと立てられない概念です」

性があまりにも当たり前になり、逆に性を語ることが難しくなったといえないだろうか。

ジョルジュ・バタイユ
●バタイユは処女作『眼球譚』において、性的欲望の執拗な追究を描いた。『全集』の刊行とともに、エロスを人間の根源とした彼の思想は、20世紀を代表するエロス論と認識されるようになった。

ミシェル・フーコー
●『性の歴史』第一部は西洋近代社会において権力装置として機能してきた「性欲」を暴いた。二、三部で古代ギリシャ・ローマの性道徳を探究、自己抑制し自由人として性を謳歌することを説いた。

1995-46-ⓜ/13

『自由時間』第6巻第12号通巻 105号　95年7月6日号 pp. 30-31 マガジンハウス

性愛論

動物のセックスは子孫を残すための生殖行為にすぎない。セックスを愛情表現の一手段として捉えているのは人間だけだ。しかし、セックスにとって愛は本当に不可欠なものか。その分野の著書がある男女2人に性愛論を聞いた。

撮影／吉岡真二郎・上杉　敬　取材・文／小林　栴

人間は人間になった時から、性に関して享楽的だった。それはずーっと変わらない。

橋爪大三郎さん 東京工業大学教授

はしづめ・だいさぶろう●1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。東京工業大学教授。専攻社会学。著書多数。

日本語の「恋」の語源は「乞い」である。だから、「恋」には相手（の体）が欲しい、という感情が含まれていて当然なのだ。それがむしろ恋の実態といっていい。

「ところが、動物と違い人間は生きていくことの定義をどんどん変えてきたわけです。たとえば、這ってでも生きていけますが、這って生きていくのは人間じゃないと思うわけですね。だから、性愛も人間らしくしなくちゃいけないと考えるわけで、性の実態そのものよりも、それをどう意味づけるかということのほうが大切になってしまった。つまり、性をめぐる妄想そのものが、人間の場合は性の実態になってしまっているんです」

と、橋爪大三郎さん。では、人間らしい性愛とは何だろう。社会学の立場から、性愛とは表現である、と橋爪さんは説く。

「性愛に関する全部が妄想といってもよいのです。大脳の発達によって人間が考えることは必然ですが、しかし、どう考えなきゃいけないってことはないんです。だから男女の関係にも、無数のパターンがありうる。そのあり方は、おのおの文化で決まっていたのですが、現代は自由の時代。固定観念に捉われていてはうまくいかない。パートナーと相談しながら、時には喧嘩しながら考え方をまとめていくしかないんじゃないでしょうか。その意味でも性愛は一つの表現といえるのです」

かつて奈良林祥さんは、1970年代にベストセラーになった『HOW TO SEX』の中で、〈ベッドルームには、ルールもなければタブーもない、というのがルール〉と書いた。性の解放を謳い上げた古典的なセリフだ。

だが、はるかそのずっと以前から、人間は性に対して享楽的だったという。

「人間が人間になった時から、性愛は享楽的になったんですよ。動物と違って発情期のない人間は、種の保存のための手段として性から解放されて、あくまでも性のための性を楽しむことが可能になったんです。セックスには愛が必要だというような理屈は後からくっついてきたことで、これまた人間らしい妄想というか、思い込みでしょう」

人間の性行動の特徴は、知り合ってからセックスに至るまでのプロセス、そしてセックスのあり方そのものも、とても複雑で入り組んでいることだ。

たとえば、性技。

「動物の性行動は、おおむね本能的なものなんです。生まれついてのプロセスなんです。人間の場合もそういう要素がないとはいえませんが、それ以外の後天的に習得された部分が非常に大きい」

人間は指にしろ、自分の体を意識的に、また多様に動かすことができることから、いろんなテクニックが可能になった。言葉をしゃべる関係もあって、唇の神経も発達している。

同時に発達したのが大脳だ。これによって、単なるテクニックの範囲を超えて、人間の性愛の幅が広くなった。

「自分の体の反応、相手の情報をキャッチする能力が、これによって非常に大きくなりました。たとえば、片目をつぶったことで相手の感情を読み取るとか、二次的、三次的に情報を処理していくわけです。その終わりのない妄想の中に愛と呼ばれるものがあるんですよ」

妄想の産物である以上、性愛は無限の可能性を秘めている。この性愛が今後どう変化するか、予想してみるのは楽しい。

社会学の立場から論じた『性愛論』（岩波書店）。

最新刊は若い女性向けの『性の美学』（角川書店）。

オーガズムはもちろんあったほうがいいけど、それより大切なものは愛情ですよ。

松本侑子さん 作家

「こうされたらいちばん幸せだとか、興奮するという性の嗜好は、人間の数ほどあると思うんですが、好みが多様という点で、セックスはご飯に似ていると思います」

と、作家の松本侑子さんだ。さて、そのココロ。

「セックスもご飯も楽しく、おいしく、うれしい。体にもいい。私たちは誰かとご飯を食べながら、相手の好きな食べ物、食べ方の癖、ご飯についての考え方を知り、その人を理解していきます。セックスも同じように肌の匂い、髪の手触り、性についての考え方を少しずつ知っていく。でも、一度や二度食事やセックスしても、お互いによく分からない。これも似てますよね」

いかにもあっけらかんとした性愛観。すごく分かりやすい比喩だ。ここにはセックスに対するこれっぽっちのためらいも、罪悪感もない。文字どおり、食事と同じくセックスはごく日常的なものなのだ。

今年1月に結婚したばかりの松本さんは、

「私自身は、セックスを愛情表現と考えていますけど」と前置きしつつも、

「セックスというものは本来、健康的なもので、おおらかなものだと思うんです。必ずしもセックスに愛が必要だとは思いません。たとえばおいしいものを食べる時に、家で家族とくつろいで食べるのも楽しいけれども、同時に私たちは外で本当にプロフェッショナルな食を楽しむ快楽も知ってますよね。だから、男女平等が達成されたら、性の快楽を金銭に代えて手に入れるのは個人の人生観だと思うんですよ。今のように女性や発展途上国の人だけが性を売っているような時代ではダメですけどね」。

最近は、人の違いは性差よりも個体差が大きいといわれているが、性の売買も男女差よりも、最後は、その人の性愛観や異性観によるだろう、などなど……。

「結局、お互いパートナー同士、自分の殻を破って、したいことをお互いに求め合いリラックスするのがセックスじゃないかと思うんですよ。子供をつくるためのセックスは生涯のうちの本当にごくわずかで、大部分は愛情表現とか、性欲を満たすためのものですからね。だったら、お互いが求め合うことをしたほうが幸せではないでしょうか。もちろん、したくないことを無理してする必要もないんですけど」

では、女性の立場から考える最高の性愛とは？　答えは簡単、それぞれパートナーに何をどうしてもらいたいか、直接聞いたほうがいい、というのが松本さんの意見だ。そういうことも聞けないでセックスをするのは逆におかしい、という。

「人間のもっとも深いコミュニケーションがセックスなんです。そこで何も聞けないってことは、お互いにうまくコミュニケートできていないということでしょう。第一、お互いの気持ちがうまく結びついている時は、テクニックにこだわらなくても女の人はオーガズムに達しますよ」

仮にオーガズムがなくても、本当にふたりのコミュニケートがうまくいっている時は、女性にそれほどの不満はないという。

「男の性はこうあるべきだとか、あまり固定観念に捉われないことですね。女の人を喜ばせるだけで、自分はその場で声を上げたりすることが、何か男の沽券にかかわるみたいに考えている人が多いような気がするんですね。こういう思い込みが性の豊かさを狭めているんじゃないかと思います。女性を喜ばせることばかり考えなくてもいいんですよ。本当に快感を得たい時は、女の人だってマスターベーションをすることもできますから」

詰まるところ、理想的な性愛は、愛情のあるなしとやはり深く関わり合うことになりそうだ。

まつもと・ゆうこ●1963年生まれ。筑波大学社会学類卒業。『自食症の明けない夜明け』をはじめ、小説、エッセー等の著書あり。

1995-46-⑧/13
『SHINKEN TSUSHIN』第195号 95.6.10 pp.18-21 ベネッセコーポレーション

なぜ人は集ったか、そして「集う」はどう発展してきたか？
集落から大都市への発展を例にとり

「集う」の発展を追う

――レクチャー：橋爪　大三郎先生（東京工業大学助教授）

プロフィール
橋爪　大三郎先生
1977年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。
以後無所属で執筆活動を続け、1989年より
東京工業大学助教授。
主な著書に『はじめての構造主義』（講談社現代新書）、
『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）
など。

初期の集う目的は"組織防衛"

人にとって、文化にとって、そして歴史にとって、「集う」はどういう意味を持っているのでしょうか。そして「集う」ことで何を生みだしてきたのでしょうか。東工大の橋爪先生に社会学の観点からお話をうかがいます。

「人間も集まっているけれど、動物だって集まって生きているのです。人も一人では生きていけないし、動物も生きていけません。なぜかっていうと子孫を残さなきゃいけない。オスとメス、これが最小単位ですね」

たとえ最小単位といえども、原則的に人は種族保存のために集わなくてはならない生き物のようです。そしてこの最小単位を基本にして、「集う」の規模は大きくなっていきます。では、「集う」の次の段階、現在の街、都市、国の始まりである集落は、どのように生まれてきたのでしょうか。話は、進化する以前の、猿の時代にさかのぼります。

「これはある人の説なんですが、霊長類はもともと森林に適応した種だったんですね、ゴリラとかオランウータンとか。森林にはほとんど天敵がいなかったから、彼らにとって天国のようなものだった。

でもそのせいで、今度は人口過剰になってしまったのです。そこで困って、原っぱに出てくる連中が現れた。草原にはライオンとか危険な動物がいっぱいいる。その試練をくぐり抜け、生き抜く知恵を持つようになったのが人間の祖先というわけです。彼らは集まることを武器にして生き延びるという戦略をとりました。集団でいれば、誰かがライオンに食べられてしまっても、残りの人間たちはその間に逃げることができるでしょう。そのうちだんだんに、棒や火を使うことも覚えていきますが、大勢の人が火を焚いてワイワイやっていれば、そうそうライオンも近づいてきません。そうやって集団を守っていったんです」

こうした組織防衛の心理は深い精神的な記憶となって、現代の私たちにまで息づいています（こうした心理的な面については後ほどのコーナーで）。

農業の発生が「集う」を劇的に変革した

しかしこの時点ではまだ「集う」はごく小規模なものでした。これが劇的に変わった事件は『農業の発生』です。

「農業によって、人々は移動しながら生きていくという不安定な状態から、定住生活に変わりました。食糧が確保できるようになってたちまち人口が増えていくのです」

やっと安住の場所を見つけた人類。しかしその人類の安全を脅かす天敵が現れてきます。それはライオンではなく、ほかならぬ人類自身でした。

「豊かな収穫のあるグループを羨ましく思うグループがいるんです。それが取り入れの頃になるとワーッとやってきてみんな持ってっちゃう。1回なら我慢もするけど毎年です。そうすると当然、定住する側でも武装する。要塞作りが始まるのです。そしてこれが都市国家に発展していきます」

この都市国家が機能するためには、人口が多い／農業をやっている／常時戦争などの緊張状態にある（集団防衛とともに集団攻撃）／そのための指揮命令系統が確立されている、の4点が挙げられます。そしてこの時代からの伝統、集うことによって生まれた負の遺産である戦争は現代まで続けられてきています。集うことによって得られたはずの安住は、また新たな不幸の幕開けともなってしまったのです。

「動物の中で、一応生活設計が立ち、明日をも知れない身ではない、なんていうのは人間だけなんです。ヘーゲルが言ってますが、大抵の動物は他の動物に食べられて死んでしまう。でも人間が他の動物に食べられて死んだら新聞記事になる大事件ですよね。基本的に人間は、食物連鎖から断ち切られてる存在なんです。エコロジーから切れているのです。その分、人間自身が天敵なんです。エコロジーから切れてしまった罰なんです。都市国家ができ、ここで政治・軍事・外交が発達し、民族紛争が恒常化する。農業が転換点なんです。農業以前は戦争なんてありえなかった。ケンカになったら逃げてしまえばよかったし、人間の人口密度なんてたかが知れていましたから」

集うことによって豊かな恵みと安定を得たところから、すでに負の部分も始まっていたのです。（図1）

日本と他国との「集う」の根本的な意識の違いとは？

「世界史の七不思議なんですが日本には都市国家はなかったんです。都市国家＝文明ですから、日本は今も昔も非文明国といえます。なぜでしょう？」

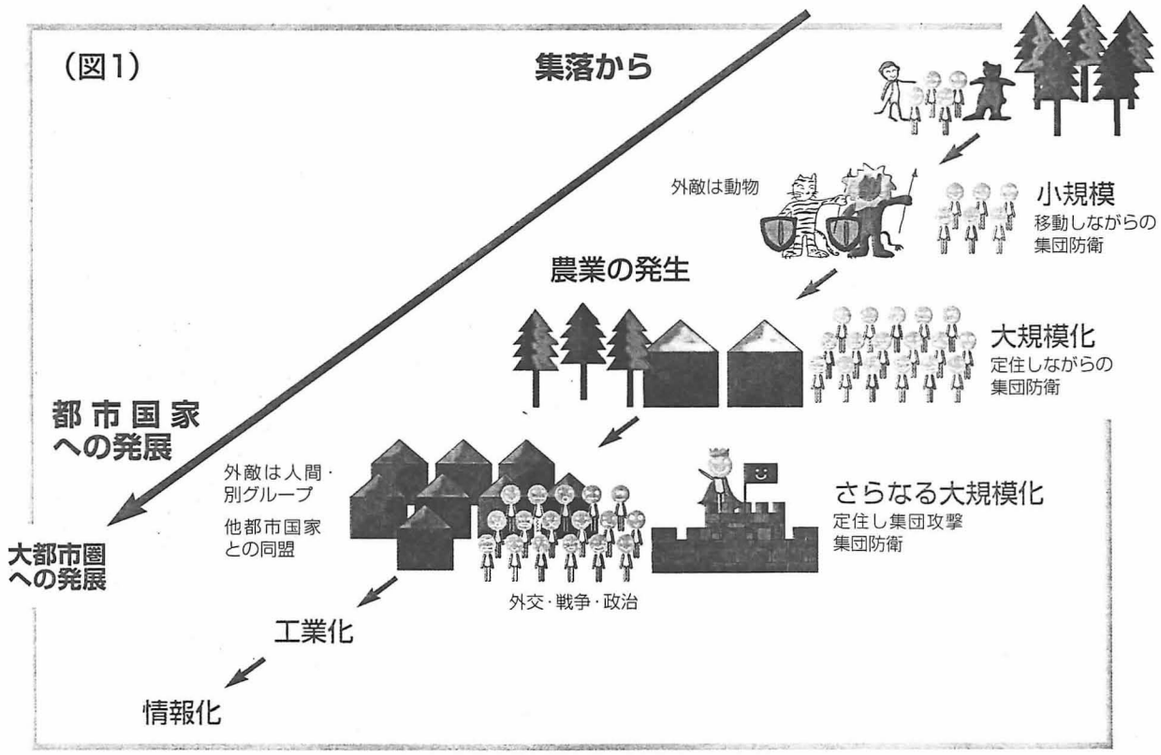
中国、ローマ、ギリシャ、アステカ、インド…、あらゆる地域に存在した都市国家。しかし日本には存在しなかった、と橋爪先生は言います。農業も、内戦も、日本ではありましたが…。

「答えは日本では皆殺し戦争の必要がなかった。都市国家間の戦争というのは基本的に、異民族の土地を奪うための皆殺し戦争なんです。それが文明なんですね。でも日本人は相手も全部日本人だと思っていたらしい」

歴史上、日本には異民族からの皆殺し戦争を仕掛けられた経験がなかったために、発想として、皆殺しを避けるための都市国家というものが生まれてこなかったようなのです（もちろんある程度大規模な流血は繰り返されましたが、都市国家＝文明を生みだすまでの、民族全体にとっての壊滅的ダメージは受けていない）。したがって常に民族の根幹を奪う外敵を想定して集ってきた他の都市と、日本の「集う」には根本的な意識の違いがあります。

「なぜ人は集うのか？　と聞かれて一番最初に考えるのは、ヨーロッパなら『安全のため』。パリでもどこでも、前時代の遺産だけど必ず城壁があるでしょう。こうした集う＝安全の思想は今でも生きている。一方日本人が都市に集う理由はただ『便利だから』、そしてチャンスがあるから。人と出会える、就職、学問、何か刺激的なもの、こうしたチャンスを得るために集まってくる。安全のためなんていう意識は皆無だ。さらに近代になって、都市計画の発想もなくなってしまったから、自分たちがなんで集っているかという根本的な理由が分からなくなってきている。それが日本の現状なんです」

しかしただ便利さにひかれて集うことには大きな落とし穴が待っています。便利さの反面、確固たる理由がなく集い過ぎた集団には本当の意味での都



1995-46-④/13

市計画、危機管理の発想も生まれてきません。災害、公害などに対する安全の意識まで無防備という、非常にもろい状態になっているといえます。

巨大になりすぎた「集う」に対して生まれた逆行現象

さて「集う」の歴史を集落～大都市への流れの中で見てきましたが、膨らみ過ぎた現在の「集う」はこれからどうなっていくのでしょうか。

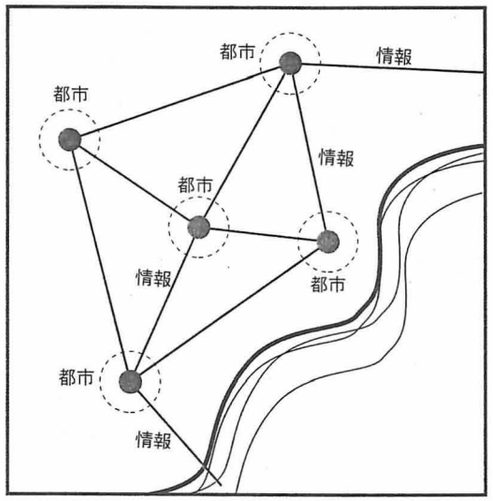
「今の時代、行くところまで行ってしまったので膨張とは逆方向の考え方もでてきています。シンプルライフがいいとか、エコロジーが大切だとか、自然の中でボカーンとしたいとか。都市生活でないものへの憧れが生まれてきたんです。これが本物なら都市化に歯止めがかかるはずなんですが、現状はまだ『たまにはそれもいいや』というレベルですね」

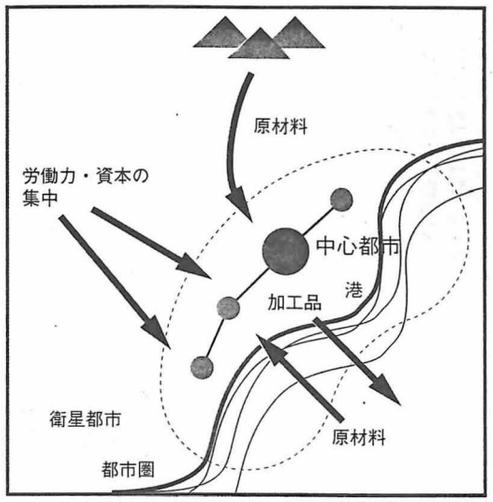
しかし橋爪先生は、すでに集中型（大規模な「集う」）から分散化（「集う」の小規模化）へ変わるための素地は充分整っていると言います。そのキーワードは「情報化社会」。古代の都市国家では豊かな土地、守りやすい土地に大都市が築かれ、産業革命以後は工業に適した合理的な場所（最適立地点）を中心にして大都市が築かれてきましたが、主要資源が「情報」になる21世紀には、大都市の定義がガラっと変わっています。多くの人が一カ所に集まらなくても、従来以上の生産性がもたらされるのです。

「あとは誰が始めるかですね。イギリスからアメリカに渡ったメイフラワー号のように、最初に行った人は大変。数々の困難を乗り越えて、やっと快適に暮らせるようになるわけです。確かに初めは大変かも知れませんが、新しい地に踏み込むことで、現状の集まりの中で束縛されていた頃よりも、結果として、相対的にはより多くの自由を手に入れることができるんですね」

目に見えない情報という存在が、城壁を無力化し、何万年もの間集わなければ身を守れなかった人間のあり方を変えようとしている今、これからの時代の「集う」は本来の防衛本能、種の保存というだけではない、新しい意味を持つのかも知れません。

（図2）





スーパーファミコンソフト『シヴィライゼーション』で
都市国家＝文明の発展を体感する

橋爪先生にレクチャーいただいた、初期の集落から都市国家への変遷を、体験できるシミュレーション・ゲームソフトがあります。『シヴィライゼーション』～世界七大文明です。果たしてゲームの世界で「集う」の発展はどう表現されているのでしょうか？　このゲームを発売している株式会社アスミックの岡本マネージャーに、実際にプレイをしていただきながらお話を伺います。

まずはゲームの概略から。

「プレイヤーが一つの民族の指導者となって、都市を建設し、人を増やし、他文明と接触、外交、戦争を繰り返しながら、自らの文明を築いていくものです。その過程では自国の都市圏にいかに人を集めるか、増やすか、という点がひとつのポイントになります」

ゲーム開始時は移民の集落程度だった街が、人が集ってくることで、大きな都市に変貌していくさまは、岡本さんのデモプレイを見ているとなかなか劇的。しかしそのためにプレイヤーがしなければならない役目はかなりのもの。

・都市の建設／発展（農業／商業／資源の確保、道路などの建設）
・開拓／植民（国土の拡大）
・世界の探検
・戦争／和平（時を経て兵器も進化）
・文化の発展（科学技術の発明など）
・政治体制の変革（専制政治から民主主義までの段階が踏める）

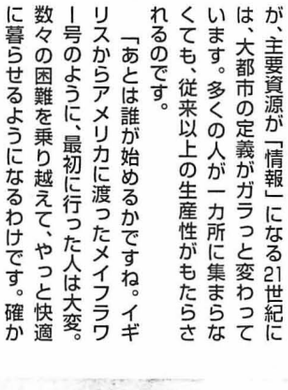
こうしたステップを踏みながら、都市圏・国土を拡大します。しかしなにより基本は都市に人を集めること。「人を増やすことで生産力、軍事力、さらに発明などの科学力が増大していきます。こうすることで国力があがっていくわけです。そのために灌漑農業をしたり、税率のバランスをとったり、水道を作ってみたり、プレイヤーがいろいろ考えていくんです」

このバランスが悪いと「不幸な人」という存在が増え、生産力の低下、暴動などもおこります。

さらに集い、強力になった都市国家の宿命ともいえる他文明とのかかわり方にもこのゲームの味があります。

「戦争と平和のバランスをどうとっていくか。他文明を潰すのか、共存するのか。この駆け引きが魅力ですね」

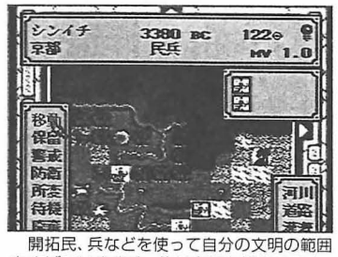
やり方は人それぞれですが、やり方によっては、歴史上のどこかの都市国家（ローマやエジプト）のたどった過程を再現することも可能というシヴィライゼーション。都市国家の大河ドラマを自分の部屋で体験できます。



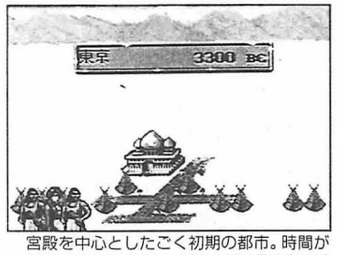
「平和的な文明を育てていくことも、軍備を中心にして相手の文明を滅ぼすこともプレイヤー次第。自由度が高いんです」と岡本さん。

このゲームは初めはパソコンゲームとしてアメリカで発売され、様々な賞を総ナメにしてベストセラーとなっています。スーパーファミコン版でもその面白さは◎。

『シヴィライゼーション』～世界七大文明
12,800円（税別）
発売元（株）アスミック



開拓民、兵などを使って自分の文明の範囲を広げていきます。他の文明と接触すると、科学技術や発見物の交換、交易、友好条約などの平和的な出会いもありますが、逆に戦争、略奪といった血なまぐさい状態になることも。戦争は古代の民兵から現代の核戦争まで、時間の経過によって進化します。



宮殿を中心としたごく初期の都市。時間が経つにつれ穀物倉庫、兵舎、水道、図書館、城壁、市場、銀行などを造れ、現代に近づけばリサイクルセンターなども登場します。この他に万里の長城やガリレオ天文台などの「世界七不思議」を作ることもできます。

『SAPIO』第7巻第22号通巻 152号 1995.12.20 発行 小学館 pp.22-24
1995-46-⑩/13

撮影／坂本孝一

Media '95 大新聞の過ち

『誤報』あり『記者クラブ談合』あり——

発の今年も大新聞の「報」は改善されなかった

上／地下鉄サリン事件。史上空前の集中豪雨的報道はここから始まった。

下／10月26日の麻原被告初公判は延期された。オウムフィーバーはいつまで続くのか。

麻原被告の弁護人、横山昭二弁護士に次々と質問を浴びせる取材陣。

撮影／小笠原画人子

「事実には三つある。第一に科学的事実。第二に法律的事実。そして第三がマスメディアが決定する事実である」

松本サリン事件では、何の罪もない市民が多くのマスメディアによって「犯罪者」とされた。メディアが集中豪雨的な報道をすればそれが〝事実〟になってしまう現実がある以上、その事実を根拠の検証せずにタレ流し報道をすることは許されない。

95年の報道戦争で露呈したメディアの問題点を東京工業大学の橋爪大三郎氏が徹底検証する。

東京工業大学教授
橋爪大三郎
DAISABURO HASHIZUME

テレビや新聞、雑誌など、日本のマスメディアの報道姿勢には前々から困ったものだと思っていたが、この1年、それがますます目に余るようになった。

マスコミにもハイテク技術革新の波が押し寄せて、これまで以上にきれいな画面、これまで以上の速報性が求められ、生き残り競争が激化している。でも、こうした競争がかえって、マスコミの堕落に輪をかける結果となるのです。

なぜか？ 本来なら、マスコミの側にジャーナリズムとしての見識と、確固たるスタンスがあって、言いたいことを読者・視聴者に届けている。それなら技術革新が進めば進むほど、マスメディアの体質が強化されます。

でも、その逆の場合、伝えたいことがそもそもメディアの側にないのに、とにかく読者・視聴者を自分のところにひきつけておくためだけの競争が激化する。その結果、あるべき報道の枠などますますどうでもよくなってしまう。とにかく、面白ければいいとか、他者より先走った報道をすればいいとか、舞台裏を暴けばいいとかいった、ますますメチャクチャな報道スタイルになっていく。報道にたずさわる本人たちも、これではまずいと感じてはいても、どうしようもないのです。以下、6つの問題点を列挙して、このことをつぶさに検証してみましょう。

①あまりにも不勉強

松本サリン事件の教訓は、警察発表を鵜呑みにしては誤報をチェックできないということのはずだった。でも、警察発表に頼りきっているのは、オウム報道も同じ。まったく進歩がない。

刑事事件の報道で、一方（警察）に情報を頼ったのでは、被告の人権を守れるはずもない。事実を明らかにすることを任務とするなら、取材をさぼってはだめだ。どんな事実も、少なくとも二系統のソースから確かめる、つまり裏をとること。もうひとつは、事実の断片をつなぎ合わせるための基礎知識を、ふだんから養っておくことです。

新聞記者はケチな特ダネ合戦やサツ回りなどせず、ものごとの基礎知識を勉強しておくことが大切だ。基礎知識がない者がいくら取材しても、ものごとの真相は明らかにできない。逆に、基礎知識さえあれば、わずかな事実からでも立派な記事がかけるのです。

松本サリン事件を思い出してみよう。事件直後にそれがガス漏れ事故ではなく有毒ガス、それもナチス・ドイツが開発したサリンによる事件だということが明らかになった。基礎知識があれば、これが空き地で、試験官を使って簡単に発生させられるような代物でないことはわかったはずだ。しかも、重要参考人とされた会社員K氏宅から押収されたシアン化合物は、サリンと何の関係もない。県警が自信たっぷりになにを発表しようと、そんなことはありえないと記事に書かなければならなかったのです。

それでも、事件から2週間経ったころには、現場記者たちは、会社員K氏は限りなくシロに近いと感じるようになったという。でもそれが、東京本社のデスクに伝わらず、あたかも犯人であるかのような報道が続きました。

記者が知識がなく、取材もせず、デスクも不見識となれば、新聞とはいったい何でしょう。

毎日新聞社

阪神大震災のため臨時の編集室で取材を続けた神戸新聞の記者たち。

②諸悪の根源・記者クラブ

江藤総務庁長官（当時）が韓国についての問題発言で辞任した。ここでまたぞろ露呈したのは、記者クラブ制度という奇怪な存在の問題性です。

記者クラブは、一刻も早くなくすべきだ。談合・横並び体質の記者クラブは、日本のマスコミが本来あるべき取材競争を恐れ、それより官僚統制を歓迎している何よりの証拠である。

刑事事件の場合、犯人を逮捕して取調べができるのは警察などの公権力。彼らが一次情報を握っている関係で、取材がしにくいのはよくわかる。それに、犯人の周辺を取材しようと思っても、すんなり応じてくれるとは限らない。一般市民には原則として、いついかなる理由があろうと取材を拒否する権利がある。

そこで取材をあきらめてしまって、警察の「大本営発表」に依存する。これなら他社も載せている大事な記事を書きもらす心配はない。

ほかの省庁の場合も右にならえで、取材を放棄しているのが記者クラブなのです。政治権力から独立した第4権としてふるまうべきジャーナリズムにとって、これがどれほど致命的でスキャンダラスなことか、マスコミ関係者はよく考えてみるべきだ。

③感情ジャーナリズム

日本の記者は、正義感が強すぎて、犯人憎しの情にかられるのかもしれない。でもそれはだめ。裁判で刑事責任が確定するまでは、どんな凶悪犯罪の容疑者も「推定無罪」とみなすのが原則です。被告の人権を守るために、被告の取材がむずかしくても、いやそれだからこそ、あえて被告の視点に立って、被告に有利な情報はないかと裏をとる作業を続けていく。これでやっと、一方的な警察発表とバランスがとれるのです。

でも残念ながら、日本のマスコミはそんなことをほとんどやっていない。そしてそれが、人権に反する行為だとも思っていない。

むしろたいていの場合、記者自らが、「犯人を許すものか」という感情にかられてしまって、「悪びれた様子もなく」「遺族は怒りを新たにした」などといった文章を書く。プロであるなら、事実の報道に徹するべきで、感情をさしはさんではいけない。価値判断は読者にゆだねるべきだろう。でも日本の記者は生意気で、あるいは妙に思い上がっていて、自分がけしからんと思っている問題をけしからんと記事に書けば、読者もけしからんと思うと信じ込んでいる。これこそ、国民を愚弄することにほかならない。

沖縄の少女レイプ事件報道も、ひどいものだった。痛ましい事件が起こったのをいいことに、それを地位協定の問題から基地反対、安保反対の文脈へと結びつ

〈PROFILE〉1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。著書・訳書に「はじめての構造主義」「中国官僚天国」「大問題！」「橋爪大三郎の社会学講義」など。

日本経済新聞　おまけ　1995年(平成7年)11月19日(日曜日)
SUNDAY NIKKEI

ウエーブ

『社会学の時代』再来
平易に現代を読み解く

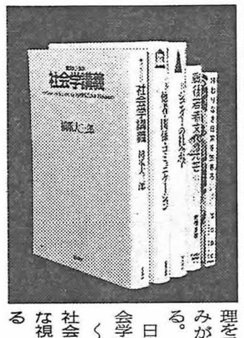
現代社会に対する不透明感が強まる中、社会を読み解く学問としての期待を受けて社会学が勢いづいている。最近の特徴は一般読者に語りかけるような平易な書きぶり。あらゆる社会現象を研究対象とするだけに、新しい分野の開拓も成果をあげつつある。社会現象を分析するだけでなく、具体的に新しい行動指針を示す「行動する社会学」の試みも目立つ。混とんとした時代の要請を背景に、社会学の時代が再び到来したようだ。

□　□

「社会学」を『広辞苑』で引くと、「人間の社会的共同生活の構造や機能について研究する学問」とある。辞書的定義とはこういうものだろうが、抽象的でわかりづらい。橋爪大三郎東京工業大学教授の『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)も「『社会学』は、つかみどころのない学問だという声を、よく耳にする」と始まる。著者は、一貫して分かりやすい言葉で社会学的なものの見方の重要性を問い掛けてきた社会学者だ。

「社会学講義」と題されているものの、同書は教科書的な社会学の入門書ではない。各章の見出しからも著者の問題意識は読み取れる。「オウム真理教はいかに、陰謀集団に変質したか」「政教分離について」「日本の政治権力はどのように作動するのか」「資本主義再入門」。現在の日本において広く関心を持たれながらも、明解な答えを用意しにくい種類のこうした問題に、著者は基礎から順序立てて問題の答えを導いていく。

著者が本書で目指したのは、「日本語でどこまで社会学ができるか。人びとが日頃抱いている社会についての共通了解を土台にして、社会の構想をなるべく上の方まで積み上げていくこと」。「日本の諸制度は制度疲労を起こしている」と見る著者は、「法や制度の設計思想にまで立ち返って、新たな設計思想を提示するのも社会学者の役割」という。社会の見取り図にとどまらず、次代への行動原理を示す意気込みがうかがえる。



社会現象に新たな視点を提示する

日本では「社会学」と訳されている仏語「sociologie」は十九世紀半ばに仏社会学者オーギュスト・コントが造り出した言葉だ。以来、約百年間、社会学にはジンメル、デュルケーム、ウエーバーらの巨人が登場し、その研究領域は広がり続けた。しかし、「その後、社会学は志が低くなった」(『橋爪大三郎の社会学講義』)。社会現象に追随したり、新奇さを狙ったりする社会学者が現れ、日本の社会学は混迷の時期を迎えた。

□　□

一方、独自の視点から新たな研究領域を開拓し続けてきた社会学者もいる。こうした研究者の仕事を通して最先端の社会問題を網羅しようと、岩波書店は十一月、シリーズ『岩波講座現代社会学』(全二十六巻、別巻一)を刊行した。二百人以上の執筆者を起用して四半世紀の社会学の成果を総まとめした、例のない社会学の大型企画だ。編集委員には井上俊、上野千鶴子、大沢真幸、見田宗介、吉見俊哉の五人が名を連ねた。

同講座の巻名を眺めると、現代の社会学の拡張ぶりが一目で分かる。第一回配本の第三巻『他者・関係・コミュニケーション』、第十一巻『ジェンダーの社会学』はじめ、身体、空間、文学、性、子供、老い、病、差別、都市、メディア、権力、ファッション、家族、環境、民族など、一見、相互に無関係とも思える分野が並ぶ。各巻とも、各問題に沿って多角的に現代社会の実相を照らし出す意欲的な論文十編前後を集めている。

編集委員は刊行の狙いを、「冷戦構造の終焉。高度情報消費社会の展開。他方で深刻化する貧困と飢餓。地球環境と資源の危機など(中略)この変動の時代に、人間社会の現象を総体として根底から把握すると同時に、現実の課題と真正面から立ち向かおうとする社会学の初心ともいうべきものが、今日再び切実な時代の課題と呼応するものとなってきています」(同講座「編集にあたって」)と、現実に引き付けて説明している。

社会的事件に対する社会学者の発言も積極的になってきた。宮台真司東京都立大学助教授の『終わりなき日常を生きろ』(筑摩書房)は、オウム真理教の問題を素材に、「終わらない日常」に対する不透明性と相対性を抱く現代人の心象風景を指摘。社会学者を連携させて『サブカルチャー神話解体』(パルコ出版)などの研究成果を導いている岩間夏樹ライズコーポレーション社長の『戦後若者文化の光芒』(日本経済新聞社)も、若者文化の軌跡を通史で読み解いた現代社会論として注目される。

□　□

イデオロギー的対立が影をひそめ、価値相対主義が広がった結果、個人が主体的に社会の見取り図を描くことはいっそう難しくなった。その意味から社会学者の活動に寄せる期待は大きく、今後は、現象の解説を超えた具体的な視点の提示をより求められることになりそうだ。

文化部　西村顕治

毎日新聞社

米大使館前で、沖縄少女暴行事件に抗議する市民団体。

けていく。地位協定、基地や安保がそんなに問題であれば、この事件と関係なくふだんからキャンペーンを張っていなければならない。それをしないで、連日の大見出しで反基地、反安保を煽り立てた朝日新聞は、見ていて冷や冷やした。

情勢を有利に展開するためなら、国民感情に火をつけるのも辞さない火遊び感覚の世論誘導は、危険この上ない。安保がなくなったら、脅えた国民はまたまた感情的になって、たちまち核武装を支持するかもしれないという可能性を、真剣に検討した気配のない大新聞の底の浅さに私は深い危惧を覚えます。

④無責任報道

江藤発言問題に話を戻せば、記者クラブでのオフレコ会見のなかみを、記者の誰かが韓国の東亜日報に、ご丁寧に要約までつけてタレこんで、記事にしてもらった。それで江藤長官は辞職に追い込まれたわけだが、これが問題なのは、何重ものルール違反であるということ。

まずオフレコ発言を外部にもらしたということ。オフレコ会見の是非は別として、いったん同意して出席したからには、約束を守る義務がある。それを反故にしたのでは、政治家が以後、記者に本音を言わなくなる。

第2に、話題提供者が辞職してしまったのでは、取材源の秘匿の原則はどこに行ったのか。

第3に、オフレコ発言のどれを漏らすか、記者の胸先三寸で大臣の首がとぶのなら、これは公権力に対する重大な干渉だ。こんな前例を許していいはずがない。

第4に、記者(新聞社)は独自に意図があってやったことだろうが、その程度のことのために、韓国のマスコミを巻きこんで、両国の国民感情をいたずらにギクシャクさせてしまった。こんな責任の取りようもないことを、ジャーナリストは絶対やってはいけないのである。

後日報じられた発言の要約を見ると、それなりにまともで、特に目くじらを立てるほどのこともない。それを、特定の意図をもって外部にもらした記者の責任が問われないのは、実に奇妙です。

⑤〝冤罪報道〟の構造

われわれ人間は、事実を認識し、そのうえに自分の現実、世界像を組み立てていく。では、事実とは何かというと、いくつもある。まず、科学的事実。これは科学者が決定する。第2に、法的事実。これは、刑事と民事で少し異なるが、要するに裁判所が決定する。法的責任を問う場合、これが基本になる。

第3に実は、マスメディアが決定する事実というものがある。政府がどう言おうと、有名人がどう言おうと、いったんマスコミが報じたものは、報道された段階で事実となってしまうのだ。そしてこれは、事実とは限らない。

もう一度、松本サリン事件の例をあげると、重要参考人だ、限りなくクロに近い、などと連日報じられると、犯人と名指しされなくても犯人になってしまう。それなら最低限、取材と、基礎知識と、そして報道機関相互のチェックとが欠かせないはずです。

⑥サラリーマン記者の怠惰

日本には実は、ジャーナリストなどほとんどいません。いるのは、新聞社やテレビ局に勤めるサラリーマンばかり。サラリーマンの習性とは、終身雇用に安住し、組織に対する忠誠を何よりも優先させるものなのです。ところがこれが、ジャーナリストの本来の使命と、相容れないものなのです。

ジャーナリストは筆一本、勉強と取材を積み重ね、よい記事を書き、記事を商品としてメディアに売り込んで生計を立てるのが本来の姿。

欧米にはそういうジャーナリストがごまんといて、せっせといい記事を書いている。クォリティ・ペーパーは、彼ら独立したジャーナリストの集合体と考えればよいのです。

ところが、日本の新聞はまったく事情が違う。もとは大衆紙、三流紙にすぎなかった読売や朝日が、伸ばした部数を背景にのし上がって、大学新卒を大量に入社させ、サラリーマン記者を量産している。

まだ若く、ろくな記事も書けないのに何を勘違いしたのか、社旗を立てた黒塗りのハイヤーに乗るのが嬉しくてしょうがない。そんな態度で取材して、何が書けるでしょうか。

いま私が念願してやまないのは、大新聞が一刻も早くリストラを断行して、社員をいまの数十分の一にすること。そして、自由契約となって、自分の書いた記事で食べること。新聞そのものも、北海道朝日、青森朝日、みたいに地方紙に分かれたらいい。

新卒の人間はまず地方紙に入社し、そこから厳しい競争を勝ち抜いて認められた記者だけが、本社採用になる。もちろん、記者クラブなんかなくなる。そうやってジャーナリズムをいちから叩き直すことが、日本の未来にはぜひとも不可欠なのです。

『週刊東洋経済』11／18創刊記念号　（1995. 11. 18発行）東洋経済新報社
pp. 28－30　1995-46-⑫/13

日本の女性

自在に自然体で社会へ進出

「理由なき習慣」が障害になり、男女の差別解消は徐々

東京工業大学教授●橋爪大三郎

ポイント

■一定の技術を持っていて、一生働けて、結婚もできればいい。自在の構えの若い女性が多い。

■女性と家庭との関係で最後まで残るのは、育児と高齢者の介護。なお第一責任は負う形が続く。

■女性は自分の生涯の中にリスクを抱える勤労者。その女性を基準にすれば働きやすい職場になる。

職場にはいっそう女性が進出する一方、専業主婦は消滅するだろう――これが今後、日本社会の進む方向であろう。

21世紀に、女性の社会進出は、どこまで進むか？

その昔、社会主義圏で女性が社会進出したのは、生産性が低かったからだ。旧ソ連では大勢の男性が戦死した穴を、女性が埋めた。中国では機械が足りずに人海戦術。女性を家庭に閉じ込めておく余裕はなかった。これに対する資本主義国は、労働力過剰で生産性も高いので、女性を労働力にしなくてよかった。特に近代的なセクターであるサラリーマンは専業主婦を養うだけの経済的余力があった。こういう歴史的背景を見ておくべきだろう。

それがいま、どうなったか？　旧社会主義国では、所得が高い家庭では専業主婦になることが流行、一種のステータス・シンボルとなっている。逆に、資本主義国の女性はますます働き出した。特に、仕事を持ってやっと一人前に扱われるアメリカでは、男性並みに働きたいと要求するフェミニズムが一世を風靡した。

日本ではどうか？　高学歴化が進み、男性と女性の差は縮まった。せっかく専門知識を身につけたのだから、それなりの仕事につきたいという女性の希望はこれまでになく高まっている。もうひとつ日本の特質は、年齢構成の問題。次第に高齢化が進み、若年労働力が不足する日本は、女性をいっそう労働力化していかないと、そもそも労働市場のバランスが保てない。働く女性なしに社会は成り立たなくなっている。

一〇〇年もない家事の伝統

しばらく前、女性には、男女差別のない教員が人気の筆頭だった。最近は、キャリア・ウーマン志向の女性が増えている。OLにも、結婚までちょっと働きたいタイプと、一生働きたいタイプがあるが、後者のタイプがじりじり増えている。

何か手に職を持ち、一生働けるといい、結婚もできればいい――最近の女性は自然体だ。家族に病人がいるとか、夫の所得がとても高いとか、どうしても事情が許さないなら、専業主婦もいい。無理に結婚するぐらいなら、ずっと仕事を続けてもいい。そんな自在な構えの若い女性が多くなった。

というわけで、21世紀には男女の別なく職場で処遇されていくだろうが、女性にはそれでも、二つの障害がある。一つは、子供を産まなければならないこと。これでキャリアが中断されてしまう。もう一つは、過去の習慣。国会議員も大学教授も男性ばかり。女性が一流企業の重役になると、新聞ダネになる。管理職の女性だってまだ数えるほどだ。

なぜこんな差別があるのか？　いままでそうだったからというのでは理由にならない。理由のない習慣は、簡単に変えられそうだが、実はかえって変えにくいのだ。そもそもいっぺんに変えようとすると、不公平の問題が起こる。たとえば急に女性に昇進の道を開くと、その分、男性のポストがなくなる。また、その恩恵にあずかれない年配の女性も文句を言うだろう。要するに、職場の秩序が乱れてしまう。差別を解消するのにも、徐々に進めるしかないのだ。

男女の能力に違いがあるかという問題もある。現象として男女の違いはいろいろあるが、これが果たしてもともとのものか、それとも社会習慣によって男女が違うと思い込んだためのものかは不明だ。

仮になにか男女の差があったにせよ、それが理由になって男女を差別して扱わなければならない理由は、どんどんなくなっている。たとえば昔は、なんでも人力に頼って仕事をした。筋力や持久力、体力勝負ということになれば、やはり男性が有利だ。だがいま、そんな職場はほとんどない。機械化・合理化が進み、女性でも働ける。女性が働ける職場は男性も楽に働ける職場だから、そのこと自体進歩なのだ。

一定の技術を持っていて、一生働けて、結婚ができればいい。自然体の若い女性が多い　（©L JONES／イメージバンク）

専業主婦は、もっぱら家事をする存在である。家事は、昔からあったと思われがちだが、専門家の研究によると、意外に新しく、実は専業主婦と同時に出現したらしい。たとえば料理。昔は保存食を食べていて、毎日加熱して料理を作るのは上流家庭だけ、彼らがメードにやらせていた習慣だった。それがあとから一般家庭に普及していったのだ。

料理・洗濯・裁縫など、人類がその昔からワンセットの家事をやってきたみたいに思う原風景は、ここ一〇〇年あまりのうちに描かれたイメージらしい。そんな家事も、家電製品の普及で急速に解体している。

家事のなかで最後まで残るのは、育児と高齢者の介護だろう。そして女性がこれに第一責任を負うという社会通念は、なかなか改まりそうにない。いわゆる家事労働は、いくらでも分担できるが、育児や老人の介護はそうはいかない。女性は、生涯のある時期、それに縛られる。

このうち育児は、自分で産んだ子供である以上、女性がそれを選択したわけである。だから、少々の困難なら乗り越えていける。しかも育児

1995-46-(13)/13

は楽しいから、そんなに文句は出るわけがない。

問題は介護だ。これを何とか社会化できないかと、いま考えられている。自治体が間に入ってヘルパー制度を設けるなり、一人ひとりで負担しきれなければ、保険のようなかたちで助け合うなり、しかるべき方法を考えてもいい。また、そもそもこれを、女性にだけ任せてよいのかという問題もある。

企業は柔軟性を高めよ

こんな家事を覚悟しつつも、日本の女性の結婚率は相変わらず高い。結婚しないことによる社会的制裁というか、マイナス・イメージはまだかなりのものだ。ただ、結婚年齢はどんどん遅くなっている。二〇代後半はもちろんのこと、最近は三〇代の前半にもピークができるようになった。子供を産むのにすべり込みセーフというタイプの結婚である。この傾向が進むなら、三〇代の結婚はこれからもっと増えそうだ。

一方、離婚は、日本の場合、まだまだアメリカほど多くない。結婚の理想がアメリカほど明確でないからと考えられる。アメリカでは、愛情なしに結婚はしない。そして愛情を毎日確認しなければならない。愛情がなくなったらさっさと別れて、つぎの愛情を持てる相手を探そうという発想だ。子はかすがいという考えは全くない。

日本では、子供がかわいそうなどと考え、なかなか離婚できないケースが結構ある。それでも離婚は増えつつあり、率にしてアメリカの半分程度になった。ただし、アメリカと日本では文化的背景が違うので、このままどんどん増えつづけ、アメリカ並みに増えるかは疑問だ。

個人合理的に考えれば、専業主婦は結構いい選択かもしれない。働かなくても生活が保証され、時間が自由で、育児にも時間をかけられる。趣味に生きることだってできる。その状態を男に支配されているとか差別されているとか思わなければ、それなりに快適でもある。

そんな主婦になりうる女性をまえに、企業は柔軟性を高めるべきだろう。柔軟とは、女性が会社を辞めてもいいし、辞めなくてもいいということ。経営者はそろそろそう考え始めているが、中年男性を中心とする従業員のほうは、まだそこまで割り切って考えていない。

住居も問題だ。都市のサラリーマンは、片道二時間、都心を遠く離れてはいるがかろうじて職場に通える場所に住んでいる。これは、夫が勤め妻が家にいるという前提だったから我慢できた。ところが、もしも夫婦が二人とも働いているとすると、どこに住むかは深刻なもめごとの種になる。おまけに、通勤手当、住宅手当がからんでくるからなおさらややこしい。

いままでの企業社会は、男性中心だった。そこを手直ししないと、このままでは家庭にヒビが入ってしまう。そこで企業も、家庭の在り方を考慮しながら、住宅の問題を考えていく時期がきている。

女性がいままで企業の戦力にならなかったのは、一生勤めてくれるかどうかよく分からなかったからだ。だが、たとえば二人に一人が辞めるのが現状だとしても、逆から言えば、二人に一人は残っているわけだ。しかも、残った一人は相当に前向きで、意欲があると期待できる。

女性が再就職できる方法をうまく考えておけば、お釣りがついて戦力となる女性が戻ってくる可能性もある。そういう意味で中途採用のルートを開こうと思えば、男性に対してよりも女性に対してのほうが開きやすい。女性を「生涯のなかに（出産という）リスクを抱えている、一人の勤労者」と思えばいい。そして、この女性を基準にして、働きやすいように職場の再雇用の条件とか、昇進のための条件とかを見直して工夫したらいい。能力と貢献度に応じて、女性を処遇する。すると女性は力を出してくる。

これからの企業は、自然体で入ってくる女性たちと、うまく付き合うことがますます必要になる。うまく付き合うとは、女性のライフ・サイクルと調和するように企業の雇用体系や管理のシステムを再編することだ。

消費者としての女性を尊重するばかりでなく、生産者としての女性をもしっかり企業戦略のなかに取り入れる。それができない企業は、立ち枯れてしまいますよと私は言いたい。

（談）

世界の潮

橋爪大三郎著

岩波書店・三〇〇円

本書が刊行された頃、世間ではアスード写真集を出版した写真家加納典明氏ら関係者四人が逮捕され、「猥褻」や「性の表現の自由」が話題となっていた。何をもって「猥褻」とするかという定義は、時代とともに変化してきたが、メディアの発達、人々の性意識の著しい変容からすると「猥褻」という言葉そのものが時代から取り残されているような印象を受ける。しかし、耳慣れてしまった「猥褻」という言葉ひとつをとっても、無造作に語られているだけで、そのルーツや法的意味や定義等々が一般の人々の間で深く追求されたことはない。社会学の旗手橋爪大三郎氏（東京工大助教授）は、「性」にまつわる諸々の事象に切り込みを入れる。論理的だが軽快で読みやすいのは、彼の基本的なスタンスが「私は社会（科）学などどうでもよく、むしろ〝性愛〟そのものへの切実な関心にひき寄せられている読者に、本書を受け入れてもらえたほうが嬉しい。ひとはなぜひとを愛するかという永遠の課題に、社会（科）学という方法を借りて、可能なかぎり答えようとする試みのひとつだ」という点にあるからだろう。

「ひとはなぜ愛するか」にはじまり「猥褻論」「性別論」「性関係論」「性愛倫理」「性愛倫理の模像」と展開して、「性愛世界の彼岸」で締めくくる。理路整然とまとめられているので、書き下ろしかと思ったら、一九八二年に執筆した未発表の旧稿「性愛論」がもとになっており、その中には「猥褻論」も含まれていたという。

本書を手にした時、タイムリーな話題だったこともあり、俗物的な私は、「猥褻論」から読んだのだが、手を入れもフーコーはむろんフランスの現代思想に精通していること、またフェミニズムの動向や問題意識を積極的に取り入れている点にある。「男女の違いは実質的か」「人びとがどれほどまでに、性別にこだわる理由はなにか？」「性別は、性をめぐって隣接するもうひとつの領域、性愛とどのようにつなぐ。

「性」めぐる社会学者の斬新な切り口

読書の時間

もっているのか？」「これまですべての社会が、異性愛を正統な性愛のかたちとしてきたのはなぜか」「規範としての性別は、永続するのか」「家族とは何か」といった難題を著者はシステマティックに解いてみせる。実際の社会は方程式を解いて解答が出るというほど単純ではないだろうが、複雑怪奇に入り組んで見える現代社会の難題をあっさり解いてしまうところに著者の魅力があるのかもしれない。

女性史研究家　山下悦子

『正論』通巻 275号（95年7月号）pp. 282-293　産経新聞社　おきな